

## いまさら聞けない乳房超音波の ABC

伊藤 吾子

### 抄 録

乳腺超音波検査には、正しい検査手技で撮像された説得力のある静止画の記録が必須である。まずは B モードで正しく所見をとらえ、判断に迷った際にはカラードプラやエラストグラフィ等の付加的所見を加味する。診断能を上げるためには、経験を積むだけでなく、病理診断結果をフィードバックすることが必要である。

### The basis of ultrasonic examination for breast lesions which can't be heard now

Ako ITOH

#### Abstract

The examiner has to scan the whole breast, detect lesions, diagnose them, and record images during breast ultrasonic examinations. Therefore, the examiner has to acquire the technical skills of examination, the ability to detect lesions, and the ability to diagnose them. In addition, the examiner has to understand the role of each mode (e.g., B mode, color Doppler, elastography), and perform comprehensive diagnosis. Experience with many examinations and knowing the pathological diagnosis are needed to achieve excellent diagnostic performance.

#### Keywords

ultrasound, breast, color Doppler, elastography

### 1. はじめに

乳房超音波検査は医療機関における診断、診療のみならず、乳癌検診領域にも取り入れられつつある。

超音波検査の特性としては、まず検者が自らプローブを「走査」しつつ、乳房全体を観察しながら病変を見つけ出す「スクリーニング」を行い、更に病変を見つけた際にはその場で大まかな「診断」を下し、それを伝えるに足る静止画を「記録」することまで行うこととなる。それ故、検者の責任は重大である。

一方、超音波診断装置としては、B モードの画像が飛躍的に改良されただけでなく、カラードプラやエラストグラフィなどの付加的ツールが搭載された機器も広く使用されており、これらをいかに使いこなすかが新たな課題となっている。

検査手技や付加的情報を踏まえた総合的な診断について改めて解説する。

### 2. 乳房超音波検査手技のコツ

#### 2.1 被検者の体位

仰臥位で検査側の背中に枕を入れ、乳房が胸郭の上に均等に乗るようにする。被検者の上肢を頭上まで拳上させるか、上肢を軽く外転させて検査を行う (Fig. 1)。上肢を頭上まで拳上させると乳房が広く扁平になり、皮膚のたわみも少なくなる<sup>1)</sup>。また、腋窩方向に伸びる乳腺組織 (axillary tail) の見落としも防げる。欠点としては、乳房の上内側がやや観察しにくいこと、および検査が長時間に渡ると被検者が腕の疲れを感じることで、腋の下を見せることに対する被検者の羞恥心などが挙げられる。被検者の腕の疲れや羞恥心に配慮しつつ、上肢を拳上して検査を開始し、上内側を観察する際には外転させることを勧める。

#### 2.2 プローブの走査

ケーブルの重みが影響しないように検者の肩にケーブルをかけるなど工夫したうえで、プローブの